G－4ムスリムであること

809．アザーンの呼びかけ

イスラム教国の朝は礼拝への参集を呼び掛ける「アザーン（adhan）」で始まる。アザーンは「アッラーは偉大なり」で始まるコーランの文句の一節[1]である。東はインドネシアから西はアフリカの西端のモロッコまで全イスラム教国はどこで聞いても同じアラビア語の呼び掛け[2]である。何故ならコーランは他の言葉に訳してはならないとコーランに記されているからである。

アッラーフアクバルアッラーフアクバル（アッラーは偉大なりアッラーは偉大なり）

ハイヤーアッラサラー（礼拝をしよう）

アッサラートハイルンミナンナウム（礼拝は睡眠よりまさる）

ホテルの窓から見ると外は夜明け前で暗く5時前である。人の動く気配は感じられる。とにかくインドネシアでは朝が早い。日昇（年中ほぼ6時）とともに人の活動が始まる。7時から就業の事務所もある。そのかわり午後の閉店も早い。

アラビア語のアザーンをイントネーションをつけて朗詠する。アッラーが与えた言葉は限りなく美しい。しかしインドネシア人でアラビア語がわかる人は宗教関係の限られた人である。一般の日本人にとってのお経以上に意味不明である。

意味は不明でもアラビア文字の読み方を覚えれば声は出せる。コーランは読むものではなく謡う[3]ものである。コーランを上手に朗詠をすることはムスリムにとって誇りである。日本のお経も声明（しょうみょう）という音楽に昇華している。

熱心なムスリムの子供はコーランを正しく読めるようにイスラム教育を受ける。先生はイマム(→870)というイスラム教の導師であり、寺小屋スタイルである。

礼拝は、①夜明け・スブー（Subuh）、②正午・ズフール（Dzuhur）、③午後・アシャール（Ashar）、④日没・マグリブ（Magrib）、⑤夜半・イシャー（Isya）、と一日5回がコーランで定められており、⑤の一日の終わりであるマグリブのお祈り[4]は時間をかけて丁寧に行われる。そのほかにも自発的な礼拝が推奨されている。アザーンが時報の替わりである。

太陽の運行に合わせてお祈りの時間は分単位で決められている。たとえば日本に滞在のイスラム教徒のために発行されている時刻表によれば 8 月某日の東京の時間は、①4.48、②11.52、③15.35、④18.46、⑤20.25 となっている。札幌はマイナス 6 分、長崎はプラス 44 分と記してある。

夕方、ジャカルタのホテルの部屋でテレビを見ていると急に画面が切り替わりアザーンが流れる。日没の礼拝の呼び掛けである。今日一日の終わりを告げる砂漠の彼方から流れてくるようなアラビア語の朗詠がムスリムでない者には“異教徒”であることを身につまされる時である。

---

[1]<訳者註>アザーンの言葉はコーランには書いてない。

[2]アザーンの呼びかけはモスクにある高い塔の上から行う。塔の上からは近辺の住居の中まで覗き込めるので、盲目の人が歓迎された。拡声器になってから人が塔の上まで上る必要がなくなった。<訳者註>昔は塔の上から叫んでいたので、同じフレーズを二回叫ぶ。これは二回目は一回目とは反対側で叫んでいたためのようである。

[3]<訳者註>「謡う」というより「誦む」のほうが適切だ。

[4]<訳者註>インドネシア人の一日はこのマグリブの礼拝から始まるのである。

810. お祈りの仕方

イスラム教徒の義務として5つの柱がコーランに明記されている。①信仰の告白[5]、②礼拝、③喜捨、④斎戒、⑤巡礼、のうち最も日常的な行が 1 日 5 回の礼拝である。

「礼拝（salat ショラット）」の前には露出個所を清めねばならない。お祈りの動作は手順が厳重に定めてある。手首、口、鼻、顔、肘、頭、足、足指と順序がある[6]。水はきれいでなければならないが、流れる水はきれいということになっている。合弁会社では足洗い場がないので手洗い場で足を洗う光景がある。欲しいのは少しの配慮である。

礼拝は「キブラ（kiblat）」というメッカの方向に行う[7]。モスクはメッカに向いて建っているので間違えることはない、イスラム教徒の宿泊するホテルの部屋の天井にはキブラが矢印で示してある。旅先ではメッカの方向を確かめるための磁石は必需品である。お祈りの動作はこと細かく決められているので仮にインドネシアとアフリカのムスリムと一緒になっても礼拝は整然として行われる。

お祈り用の絨毯（じゅうたん）一枚でも聖なる場所[8]であれば礼拝所になりうる。この絨毯は座るものではない。お祈りの際は絨毯の端に座り、前に身を屈めて絨毯に頭を臥せる。絨毯はデコの保護具である。それでもお祈りの際デコが地面につかえそれが重なるとタコができる。デコに祈りダコのある人は熱心なムスリムである。お祈りの際には帽子をつけている。ペチ(→784)またはトピーといわれる鍔（つば）のない帽子は髪が乱れないようにするもので本来はお祈りのためのものである[9]。

日々のお祈りは家の近く「ムショラ（mushollа）」という礼拝所で行う、職場にも礼拝の場所が設けてある。空港などの公の施設にはお祈りの場所がある。女性は家ですますことが多い。礼拝場所はモスクでなくてもよい。

しかし金曜日の礼拝は特に重要で必ず正午の礼拝にはモスクへ行き、大勢の人と一緒に集団礼拝することが定められている。官庁では金曜日は 11 時頃までに勤務を終わり、職場近くのモスクへお祈りに出かける。モスクへ入れ切れない人は外にあふれる。

このため金曜日も出勤日であるが、仕事はあまりはかどらない。金曜日の昼に事務所仕に人がいればイスラム教徒でない[10]。

金曜日のモスクのお祈りは隣の人と肘が擦れ合うように座れ、とコーランに記してある。ムスリムとして団結を保つためである。この結果、数千人の人がマスゲームのように整然と並び先導者に合わせて一斉のお祈りを行う。日本のお寺の本堂の雑然とした座り方と対照的である。

日中の礼拝は近代社会では問題が生じる。農作業や商売ならとにかく近代工場で厳密に礼拝を行うためにベルト・コンベヤーを止めなければならない。戦闘中に礼拝時間になったらどうするかはイスラム諸国では

---

[5]6 つの信仰とは①アッラー、②アッラーの天使、③アッラーの経典、④アッラーの預言者、⑤審判の日、⑥天命、を信じることの告白である。

[6]<訳者註>モスクでの接触感染の防止のためであろう。

[7]<訳者註>正確には qiblat と綴る。Qiblat の方向は、カーバ神殿と地球の中心、測定位置を含む平面が地表面を切る直線の方向なのである。地球は球体であるからインドネシアから見たメッカの方向は水平面から約 30 度俯角になるので、実際上礼拝は不可能である。

[8]Fiqi では「清潔な場所」と規定してある。必ずしも聖なる場所でなくても礼拝してもかまわない。

[9]<訳者註>アタマシラミによる伝染病を防ぐためであろう。

[10]<訳者註>女性は金曜礼拝には普通は行かない。女性には金曜礼拝の義務が課されていないからだ。

真面目に議論されている。

国際ビジネスに携わるインドネシア人の熱心なイスラム教徒は日本へ来ても手洗いでも行くようにして席を外す。人のいない片隅で密かにお祈りをすますらしい。

811. モスクの風景

日常のお祈りは近所のムショラ(前項)で済ませるが、金曜日正午はモスクで集団礼拝を行わねばならない。女性は隣接した別の貧弱な建物でお祈りする。小さなモスクでは男女一緒にお祈りするが、女性用は後ろの方のカーテンで仕切られた悪い場所である。要するに女性は差別されている。

モスクの中には祭壇はなく、像や絵の装飾もなく、幾何模様のみで宗教の建物としては簡素な感じである。メッカの方向を示す壁龕(へきがん)が正面である。キブラ(前項)という絶対条件があるため道路に対してはモスクの入口が変な向きになることが多い。

入口近くにはお祈りの前に洗い清める水がある洗い場がある。構内にはミナレット(minaret)というアザーン(前項)を呼び掛ける塔がある。そもそも肉声で周りによく聞こえるように高い位置であるのに、さらに拡声器でどうしてあんなにボリュームを大きくするのかと思うのは非ムスリムである。中国系住民が「うるさい」と言ったことに端を発して暴動になるというのはよくあるパターンである。

モスクの建築様式は中東のものが基本である。しかし世界各地への伝播に従い地域の伝統建築を受け継ぐ色々なスタイルのものがある。モスクの屋上のタマネギ型の建物はインドの影響である。

ジャワで由緒あるドゥマック(→249)のモスクはジャワのクラトン(→121)建築様式が取り入れられている。スナン・ギリ(→712)の墓のあるグレシック(→137)のモスクの入口はバリ島で見られる割れ門である。仮に日本人がイスラム教の改宗した場合はモスクに“鳥居”ということもありうる。イスラム教はコーランに書かれていることには頑(かたく)なであるが、コーランに規程されていないことは驚くほど柔軟である。

近代になって西洋建築の技術も導入されている。技術のみならず超近代的なモダン建築のモスクも見られる。ジャカルタ官庁街の真ん中に 1 万名を収容するインドネシア最大の中央モスク(→709)は役人のためのものである。独立記念日にちなむ【45・8・17】という数値が設計におりこまれている。

この大きい建物も金曜日以外は閑散としている。異教徒にもモスクの門は開かれているので見学できるが、居心地はよくない。外国人が気を付けなければいけないのは靴である。必ず脱いで上がらなければならない。床の大理石は冷たい感覚が気持ちがよい。女性の場合は肌を隠さなければならないのが厄介である。

平日の午後のモスクは多くの人がいるが、何か所在なさげである。柱にもたれて談笑する人もいる。床にひっくり返って昼寝している人もいる。

そもそもイスラム教徒にとってモスクとは礼拝場所であると同時に情報交換と社交の場である。心の安らぎが得られる昼寝場所でもあるということに宗教の原点があるのかもしれない。

812. ラマダン/断食

「ラマダン（Ramadun）」はイスラム暦(→819)の 9 番目の月の名で、この月はマホメットに最初の神の啓示が授けられたことから特に重要視される月である。イスラム教徒はそれを忘れないようにラマダンの1ケ月間は、毎日、日の出から日没まで飲食を断たなければならない。ラマダンとは断食月のこと[11]である。

イスラム教徒はラマダンに「プアサ（puasa）＝断食」を行うことにより、貧困と餓えの苦痛を思い出すと共に、神からの賜物を大切にする気持ちを養う。断食は自己の修養と他人に対する寛大な態度を育成する。

イスラム教以前からアラビアでは断食の習慣があったため、アッラーが断食を命じてもそれほど違和感はなかったらしい。コーランでは随時、断食を行うこと推奨しているが、ラマダン期間中はイスラム教徒は全員、断食を守らなければならない。ただし老人、病人、妊婦、授乳中の女性は除かれる。旅行中、従軍中の者も免除されるが、後日に未達分を埋め合わさなければならない。

断食とは飲食の禁止であるが喫煙も行わない。唾(つば)を飲み込むことさえ禁じることを自らに課している敬虔なイスラム教徒もいる。口に溜まった唾を飲み込まずに周りに吐いてまわるので街が汚れる。そこまでいかなくても熱帯の日中に食事はとにかく“水”を飲まないことは、強固な意志力を必要とする。

日の出前に起きて食事を済ますので睡眠不足である。ラマダンも日がたつと段々と人の顔も険しくなってくる。ビジネスは通常通り行われるが、現実の問題として能率が落ちることは避けられない。学校も通常どおりであるが、話をすれば喉が渇くためラマダンの間は無口であるので街は静かである。

ラマダンの間はなるべくややこしい問題提起を行わずに静かにしておく、というのが非イスラム教徒のムスリムに対する思いやりである。

オランダとの独立戦争の際、共和国側は“ラマダン休戦”を呼びかけてもオランダは無視した。これによってインドネシアのみならず世界中のムスリムを憤激させたことは結果的に大きなマイナスであった。異教徒がムスリムのラマダンに乗じて何かをかち得てもこれには報復を覚悟しなければならない。

しかし現実問題としてラマダンが近代社会の生活リズムに馴染まないことも事実である。装置設備の工場ではラマダンといえど操業を止めるわけにはいかない。以前は学校もラマダン休みがあったが、イスラム教指導者の反対にもかかわらず平常授業となった。

中東のイスラム教国が主メンバーである OPEC もラマダンの際は会議も休みになる。この間に石油需給がどうなるかは“インシャらー（神の御心）”次第である。

イスラム教徒はラマダンの間は毎晩、敬虔な心で月を眺めている。特にコーランの下された断食月の終わり近くの月を崇めている。細長い月はイスラム教の象徴としていくつかのイスラム教国の国旗にもなっている。

813. ラマダンの終了

イスラム教徒の断食はイスラム暦の九の月に行われる。日の出から日没まではいっさい飲むことも食べることもしてはならない。毎日の朝の開始と晩の解禁時間は新聞にも出る。とにかくイスラム教徒にとっては神へ

[11] 〈編者註〉ラマダン月のサオムと呼ばれている斎はイスラム以前からあった風習で、この月には戦争などを避けてゆっくりと家族と過ごすことになっていた。この月の目標は断食することではなく、ゆっくりとした雰囲気でたくさん食べて栄養補給することであったと推測される。なぜならば、イスラム国ではこの月の食量の消費量が他の月の 1.5 倍に達するからである。

の帰依を試される試練の一ケ月である。

富める者も貧しき者も同じ戒律を守り、1 ヶ月同じ環境のなかで生活させる。飢餓を体験させて家族そろっての食事が何事にも代え難い喜びであることを学び、イスラム教徒の連帯意識を育ませる。

ラマダンの期間はムスリムの朝は早い。夜明けまでに食事を終えなければならないからである。2 時頃から「サウール・サウール・バゴンバゴン（起きて食事の支度をしろ）」と大音響に加えブドウッ（beduk）という太鼓の鳴り物入りで呼びかける。午前 2 時頃から間隔をおいて数回にわたる。ラマダンはムスリムにとって試練の時であるが、近所の非ムスリムにとっても我慢の時である。

日没とともに日中の断食が終わる。イスラム暦では日が沈むとその日は終りで翌日になる。まず最初に甘い菓子をジュースとともに口にする。このためラマダンの期間中は特別の見栄えのよい菓子が作られ、ビルの中の特設売り場が設けられる。すぐ口にしたくても我慢をするのがムスリムの誇りである。

ところでラマダンになると食事を控えるので食料が余るかといえばそうではない。夜明け前に食いだめをし、日没とともに大食いをする。結局、一日にとる食事の量はラマダンの間の方が多い。この結果、断食月に肥る人も珍しくない。ちなみに預言者は断食の後は棗（なつめ）を3つだけ食べたそうである。

とにかくラマダンの間はイスラム教徒は気が立っているので為政者としても食料不足にならないようにしなければならない。ラマダンでなくても定期的に断食する人がいる。敬虔なムスリムは健康のためにも断食が良いと思っている。通貨危機で食料不足になった際に、ハビビ大統領(→454)は全インドネシア人が週に二回断食すれば米が年間 300 万トン節約できると呼びかけたが、国民を怒らせただけであった。

1 ヶ月のラマダン断食月の最後の日はマラム・タクビラン（malam takbiran）といわれる。夕方になると人々はモスクや礼拝所に集まる。各自に料理や果物や飲み物を持参している。日没になると普段より大きく太鼓が響く。一緒に会食が始まる。家族だけで行う人もいる。

月を観測して例えば「6 時 13 分 23 秒(年によって変わる)」と決められたラマダン明けの瞬間をイスラム教徒は待っている。その時間になると町中にどよめきがする。時間にルーズなジャム・カラット(→579)の民族の奇妙な光景である。

町は神を讃えるタクビールの唱和で“Allahu akbar Allahu akbar, lahila Hillallahu wallahu akbar, Allahu akbar Walil Lahil Hamakbar” 沸き返る。ジャカルタのスナヤン広場(→162)を埋め尽くして「タクビル（takbir）」の大合唱が数万人の規模で開かれる。最近、日本でも流行しだした大晦日のカウント・ダウンを上回る規模である。

814. レバラン/断食明け

ラマダンが明けの「レバラン（Lebaran）」はあの苦しい断食をやり通した喜びの瞬間である。インドネシア語では「ブカプアサ（bukapuasa）=断食明け」「ハリラヤ（Hari Raya）＝祭日」という。その後数日はイスラム教徒の“正月”で2日間は国の祝日(→710)である。公式には「イドゥル・フィトリ（Idul Fitri）」といわれる。

都会で働く出稼ぎの人も年に一度のレバランを故郷で迎えるため帰郷する。このため鉄道、道路などの交通機関が大混雑となる。日本の正月と盆が同時にきたようなものである。公式の祝日は 2 日間であるが、帰郷者が再び都会へ戻り、日常生活が旧に復するまで 10 日から 2 週間ほどかかる。2003 年は 11 月 22 日から 30 日まで公式の休暇になった。

都会でも田舎でも当日は特にきれいに装ってモスクに集まる。衣類やサンダルを新調するのはレバランの

際である。子供にはプレゼントが送られる。会社の上司も部下にプレゼントする。親戚、友人を訪問してお祝いの挨拶を交わす。

レバランには目上の者を挨拶に訪れ許しを請うのをハラルビハラル（halal bihalal）という。挨拶の言葉「Ma'af Lahir Batin」は「私のすべての過ちを許してください」という意味である。両親には膝まついて許しを請う。親の右膝を抱くようにして深々と頭を下げる。親はその背中をかかえ、軽くうつのが儀礼である。スハルト元大統領もレバランの際に夫人の両親に許しを請う写真を見せつけていたのは、真面目なムスリムであるというパーフォマンスであろう。

召使は主人に許しを請う。ハラルビハラルは一年間の過ちはすべてご破算になるという重宝なシステムである。使用人にはお歳暮やお中元の感じで菓子や食料品の贈答品が贈られる。

その後は偉い人の家には人が続々と訪れる。この日ばかりは役所や会社のトップの自宅はオープン・ハウスになり、大勢の人が押し掛けて食事がふるまわれる。もちろんイスラム教であるから“酒”はない。

イスラム教徒の義務である喜捨(次項)もレバランには盛大に行われる。金持ちは喜捨した羊や山羊あるいは牛の数を誇る。モスクの広場でスピーカーから「どこそこの誰かさんの喜捨の羊です」との放送があり、大衆の面前で屠殺される。その場で解体された肉は貧乏人に配られる。喜捨の際は乞食も都会に集合することが大目に見られている。

毎年、レバランの際の喜捨について「今年の貰いは昨年より少しよくなった」というような乞食のスポークスマンのコメントがあった。

イエス・キリストは悪魔の誘惑を退けながら 40 日間荒野で難行苦行した故事にならって、40 日間、肉食を止め一日一食ですごし、それが終わると肉食の有りがたさを感謝する祭がカーニバルである。キリスト教徒もイスラム教徒の断食と似た習わしがあるにもかかわらず、40 日間の修業のことは忘れて謝肉祭のドンチャン騒ぎだけが生きている。東洋の非キリスト教国までが謝肉祭のドンチャン騒ぎだけを取り入れている。

815. ザカート/喜捨

「ザカート（Zakat）」という喜捨はイスラム教徒の5大義務の一つである。現世での財の一部を差し出すことによりイスラムでいう罪は浄化される。ザカートはきめ細かく決められている。農民は農産物収穫の 10%（灌漑農業は 5%でよい）、商人は保有金銀の 2.5%、遊牧民は牛は 30 頭につき1頭、羊は 40 頭につき1頭である。

この率はコーランに定めてあるものでマホメット時代以降変わっていない。受給の対象者もコーランに記してあり、インドネシアではイスラム教財団が受けとり一定の基準で貧乏人に配分する。

ザカートはイスラム教徒の義務であるが、それ以外に自発的な意志に基づく喜捨は「サダカ（Sadaqa）」といわれる。断食明けのレバランとメッカ巡礼後の犠牲祭りには金持ちは資力に応じて羊や山羊を喜捨し、解体された肉が貧乏人に配られる。

さらに大口の寄進を「ワカフ（wakaf）、アラビア語でワクフ（Waqf）」というイスラム独特の財産の寄進制度がある。土地や資金の寄進して教会を建てる。孤児院などの社会福祉も行う。ムハマディヤ(→419)では寄進を受けた学校や病院を経営している。

喜捨には日常的なものがある。例えば乞食に恵むのも喜捨である。イスラム教徒の乞食は「ありがとう」の一つもいわない。彼らの論理によれば喜捨の義務を果たす機会を与えられたことを喜捨する人が乞食に感謝

せねばならない、という理屈である。普通の身なりの人がバス停で見知らぬ人に「バス代がないので恵んでくれ」と簡単にいう。いわれた人は与えるのがイスラム教徒の義務である。

日本人が買い物をするとインドネシア人より高い価格を払わされる。裕福な人は高く払わねばならないという喜捨の考えからムスリムはやましいとは思っていない。

華人がインドネシア人に嫌われる所以の一つに喜捨への態度にありそうだ。インドネシア人は宗教信条に基づいて貧しいながらも喜捨をする。宗教の異なる裕福な中国系住民は基本的に金を出す必要はないと考えている。出す時はそれなりの計算の上であるからインドネシア人から見れば不充分だ。インドネシアで暴動というと中国系の商店が襲われて商品が略奪される。襲う方はふだんの不充分な喜捨の埋め合わせをしているだけという意識であり、あまり罪の意識はないのでなかろうか。

女中が日本人の主人に金を借りても返す気がないのは「金持ちは貧乏人に恵まねばならない」というイスラム教の教えの然らしむところであろう。

国の意識においても貧しい国は喜捨を受ける権利があると思っており、外債を本気に返す気があるのだろうかと気になる。喜捨がイスラム教徒の経済的自立への阻害になっている、という意見があることを紹介しておく。

ムスリムの義務としての喜捨は 1/10 税ともいわれるが、国家の税制とは次元が異なる問題である。熱心なムスリムは宗教行為として喜捨は行うが税金を払いたくない。しかし最近では政教分離ということで税金は税金として規則どおり収めることが定着しつつある。

816. メッカ巡礼

メッカ巡礼はイスラム教徒の5戒律の一つである。ただ単にメッカまで行くのではない。メッカでは決められた儀式がある。イスラム暦の 12 月（巡礼月）7日、世界中からメッカに到着したイスラム教徒は、まずカーバ神殿の周囲を七回まわる。次に郊外の丘の間（と言っても現在は長大な廊下の建物である）を駆け足で七回往復する。

百万人をこえる群衆が神殿の同じ向き（左回りと決まっている）にグルグルと回る時、大地は異様に震動するそうである。たまたまトンネルで停電すると千人を越える圧死者がでるという事故(1990 年)にもなる。

翌三日間[12]は 20 ㎞離れた郊外の聖地である丘と谷へ行進し、三日間の日程の儀式を終える。イスラム教徒がイスラム教徒としての連帯感に浸り、団結しうる最も大きな理由はメッカ巡礼である。貧富・老幼・男女・民族・国籍を問わずメッカの神殿の前では平等で同じイスラム教徒である。また、巡礼の期間中は性行為はもとより石鹸や香水の使用、貴金属や装飾類の着用は禁止されている。

メッカへの旅は物見遊山の旅ではない、は肉体的な苦痛を伴う信仰の旅である。服装も質素な衣服が定められている。男の巡礼者は木綿の白布を2枚だけを着用する。これは神の目には万人が平等でなければならない、という理由による。巡礼行の衣類は大事に保管して死後に神のもとへ行く死装束にする。

いくら質素な旅でも 2600 ドル（2003 年）の経済的負担は伴う。貯金をはたき借金をし、家族・親戚に見送ら

[12]1 日目はメッカからミナーへ行進しテントを張って露営する。2 日目はアラファートのラフマ山に集まってお祈りしムズダリファで宿営する。3 日目は小石を 7 個拾い、ミナーでジャムラという悪魔の象徴の石塔に石を投げてメッカに戻る。これらの場所はコーランに記された預言者ムハンマド縁の地である

れて出かける。特にメッカから遠いインドネシアからの巡礼は恵まれた人しか行けない。空港で見送った家族や親戚はそのまま空港で待っている。このため巡礼月には空港近辺にはテント村ができる。

インドネシアからの最近のメッカ巡礼は団体の飛行機である。以前、船が使用されていた当時の食事は甲板上で自炊であった。飛行機になった当初も飛行機の中で自炊が始まった、という話がある。

メッカ巡礼を終えると“ハジ(Haji)”になる。地元のアラビア半島では珍らしくない。しかし、メッカから遠いインドネシアでは希少価値がある。称号(→637)の好きなインドネシア人にハジは誇り高い称号である。彼らはハジ某、ハジャ某(女性)と呼ばれ尊敬される。その威光は宗教的次元に留まらず、社会的経済的地位すら高める。

メッカ巡礼はサウジアラビアから国別の割当[13]があり、宗教省がすべて取り仕切る。パスポートの取得とか飛行機の手配以外に世話をすることが多い。似た服装であるから迷い人も続出するということで旅行社以上の働きである。例えばカーバ神殿で頭から水をかけるというサービスもする。ありがたい水で日射病を防ぐためである。

かつてメッカ巡礼は伝染病拡販システムといわれたこともある。最近では予防医学の発達で昔のようなことはなくなった。何れにせよ病人に多いし、死者も出るという信仰以外の何物でもない苦難の旅である。

817. イスラム教徒の割礼

中東のイスラム教徒は生後7日目(7はイスラム教徒にとっては良い数字である)に割礼を行う。コーランの規定ではないが、マホメットの例にならって割礼はイスラム教徒の習慣となっている。インドネシア語では「スナタン(sunatan＝カット)」という。

インドネシアのイスラム教徒はアルコール禁止のような義務について必ずしも厳格でない。そのインドネシアのイスラム教徒も割礼だけは 100%実施する。割礼はイスラム教徒であるための資格とされている。

世界でも割礼が行われているのは必ずしもイスラム教やユダヤ教などの特定の宗教に限られていない。宗教と関係なくポリネシアやメラネシアの南太平洋地域やブラック・アフリカなどで風俗として昔から行われていた。割礼の目的は美容、衛生、快楽という実用もいわれるが、真の目的は所属集団へのアイデンティティ確立のための儀式としか言いようがない。

中東のイスラム教徒の割礼は赤ん坊の時に終えるが、インドネシア人の割礼は 12～3 歳頃が一般的なようである。インドネシアの割礼の起源がイスラム教の導入以前にまで遡りうることは共同体の“成人式”の意味合いが強い。

包皮の一部を刃物で切り取るのであるからかなりの出血と苦痛を伴う。病院での手術もあるらしいが、ドゥクン(→866)が執刀することが多い。風通しをよくするため、手術後は下着を上から吊るすようにして 2～3 日はじっとして寝ていなければならない。

割礼の際はスラマタン(→705)はもとより、富める家では祝いのワヤン(→905)が催され村人が招待される。所によっては割礼のお祝いの行列もある。男性にとっては生涯の晴れがましい場である。割礼が終わると一人前の扱いになる。

[13]1990 年代はインドネシアの割当は 5 万人であつたが、近年では 20 万人に増えているが、希望者全員は行けない。

女子にも割礼はあるが、男子の場合と事情は異なるようだ。中東諸国では女子の割礼をやってきたが、問題があるので宗教関係者からも廃止が主張されているらしい。地域の習慣に従うため、女子の割礼は一律でない。

アフリカでの女性に対する割礼は女性人権の立場から厳しく批判されているのは女子の割礼が性感を減退させる目的であるからである。インドネシアでは仮に女子の割礼をやるとしても性感を増進させる(？)ためでイスラムの意図するところとは異なる。

とにかくインドネシアの女子の割礼は 5～7 齢の頃、身内だけでこっそりと知らない間に形式だけで済んでいるのがインドネシアの風習である。何を切るのか興味があるが、切る真似だけとか、野菜が身代わりに傷つけられるという話もある。

割礼に伴う儀式だけ見ると何か男女に差別があるようだが、ちなみに結婚式では女性が主役であり、男性は脇役である。結婚式も花嫁の家で行われ、費用負担はすべて女性側が負担するのがインドネシアの伝統である。もっともジャカルタでは半々というのが今風らしい。

818. イスラム讃歌

「カシダハン(Qasidahan)」とはイスラム教の聖歌であり、コーランの朗読の伴奏音楽がその起源である。キリスト教の賛美歌とか日本の仏教の御詠歌に相当する。

伝統的な様式のチーム編成はやや大きい太鼓 3、小さい太鼓 3、タンバリン 2 の楽器 8 名に歌い手 1 名の合計 9 名のチームからなる。太鼓といっても片面の薄手のものでタンバリンくらいの大きさである。歌い手は独唱する。その他の 8 名は楽器で伴奏しながらコーラスを歌う。コーラスと独唱は掛け合いのような形になる。

テレビで見るフオークロア音楽にでもありそうな歌謡のスタイルである。しかしインドネシアのカシダハンは宗教音楽である。本来のカシダハンの歌詞はアラビア語であるからインドネシア人にも意味は判らないが、コーランから引用される修身道徳的なことらしい。インドネシア語のものもある。9名のチームも全員が男か、あるいは女かのどちらかであって混声はないことにも男女関係に厳しいイスラム教の一端を見る。

曲は千曲以上もあるらしいが、楽譜はないので口頭で伝授される。結婚式などの祝い事に登場する。これが伝統的なカシダハンである。

歌の好きなスンダ人がカシダハンに熱心のようであるが、近年の都市化、近代化の中で伝統的カシダハンは急速に失われつつあり、田舎でないと見られない。たまにテレビにでるカシダハンもギターなどの西洋楽器が加わり大きく変貌しようとしている。

何よりもインドネシア人の意識が伝統的なカシダハンを田舎的なもの、遅れたものとして見下しており、特に都市のインテリには疎んじられている。近年は女性のジルバブ(→786)姿に見られるようにイスラムの復興現象が目につくが、カシダハンのような土俗的なものは埒外(らちがい)らしい。

この伝統的なカシダハンの保存に一役かった奇特な日本人がいた。ボゴール在住の大島秀夫さんは日本の繊維会社から派遣された現地の合弁会社のエンジニアであった。カシダハンを一度見てその魅力にとりつかれた。ボゴール近辺の農村で行われているカシダハンの練習に参加し、そのうちほっておけば滅びるカシダハンの保存に熱をあげることになった。保存のためにはスポンサーになることである。カシダハンをやっている人は概して貧しいので楽器や制服を買い与えることは大きな励ましになる。

イスラム教徒の子供は学校とは別に塾に通う。塾でキヤイ(→870)から教わるのはコーランの暗唱である。コーランはアラビア語で記されており他の言語に翻訳してはならない。従ってコーランの意味を習うのではなく、ひたすら暗唱するだけである。

コーランを暗唱して謡う。節をつけて朗々と謡い上げることがイスラム教徒の誇りである。コーランの朗詠のコンテストがあり、イスラム教徒はこぞって参加する。

コーラン唱和は大人もやる。「プガジアン(pengajian)」というコーラン唱和を学ぶ会が地域や職場で行われ参加者が増えている。

819. イスラム暦

イスラム教徒は独自の暦を使用している。西暦 622 年 7 月 16 日がイスラム暦の紀元元年 1 月 1 日である。預言者マホメットは生まれ故郷のメッカで迫害されたため、支援者の多いメジナに「ヒジュラ(hijrah)＝聖遷」した日である。

メッカの非信徒である親子・兄弟・親族・友人などすべての縁を絶ち切り、彼らと戦う決意をしたのがヒジュラの意味であり起源である。イスラム教徒はイスラム暦をヒジュラ暦といっている。

イスラム暦は朔望(さくぼう)月に従う純粋な太陰暦である。月の運行[14]だけで暦をつくるため一年は 354 日である。太陽暦と比較すると一年に 11 日短い。中国や日本などの太陰暦と同様にイスラム暦が定められるまでは3年に一度 13 月の閏月(うるうづき)を設けて太陽暦への調整が行われた。しかしイスラム暦には閏月がない。コーランに神が天地を創造した時に月数は 12 ケ月と記されているからである。

この結果、1年では 11 日であっても累積すると太陽暦の 33 年はイスラム暦では 34 年になる。67 歳以上の高年齢者になると2歳の差が生じる。イスラム暦を累積すると西暦 2002 年で 42 年の差が生じている。

月の運行で一ケ月は 29.5 日になるので 29 日と 30 日の月が交互にあり、新月(moon)が見えて新月(month)が始まる。ただしラマダン月だけは月の目視によることになっている。イスラム教権威者が時間になると西の空を見張っており月を実際に見て新月になる。29.5 の 0.5 が難しいところで 29 日に月がみえなければ 30 日になる。日没の太陽の反射光で月が見えないことや観測者が目が悪くて見えないこともある。何れにしてもイスラム暦に 31 日の月はないが、イスラム教の国や地域により日付が1日異なることがありうる。

またイスラム暦の一日は日没に始まり日没で終わる。断食月であるラマダンの間は日没を待ち、新しい日になれば飲食ができる。その時間は天文学から計算されて予告されており、最近の都会ではカウント・ダウンの行事が行われる。

特にラマダン明けのときは断食明けを今や遅しと固唾(かたず)をのんで新月を待っている。政府の決めたラマダン明けスケジュールへの鞘当てのため、マレーシアのスルタンが「月は見えなかった」といって1日延長させたことがある。インドネシアでも地域によってレバランが異なることがありうる。

イスラム暦では7日を1週間としており、金曜日が礼拝のため特に重要な日であってモスクでお祈りしなければならない。このため役所の就業時間では金曜日の昼休みは2時間である。中東では土曜日を週の開始とし木曜日と金曜日が休日の所がある。

---

[14]イスラム暦では 14 日が満月になる。「bugaibulanempatbelas」は「14 日の月」は美人の形容である

年中同じ気候のアラビアではイスラム暦だけでよいかもしれないが、モンスーンの風土で農業を行うためには太陽暦が絶対に必要である。従って農業を行う東南アジアのイスラム教徒はイスラム暦を宗教行事に限定して生活している。

⇒710.休日の割り振り

820. 食物のタブー

イスラム教徒が豚を食べないことはよく知られている。豚以外の牛や羊の場合といえど正しい屠殺法によるものだけが食べられる。コーランに従う屠殺とは「慈悲深く慈愛あまねくアッラーの御名において」と唱えながら喉の頚動脈を切る。これが動物に最も苦痛を与えない方法である。自然死や事故死したものは食用にしてはならない。魚でも鱗のない魚や蟹もタブーである。

イスラム教国で販売される肉には【ハラル(halal)マーク】がついている。ハラルとはイスラムの教えに適ったもの、という意味なのでイスラム教徒が安心して食べられる。ハラル食品は衛生上の検査も行なわれるので非イスラムも利用する。ハラルでないものは「ハラム(haram)」であり、ムスリムは口にしてはいけない。

イスラム教徒が豚肉を忌避する理由はコーランで不浄として禁じられているからである。なぜマホメットは豚肉を不浄として忌避したかについてはいろいろな説がある。例えば伝染病だとか寄生虫だとか糞食の忌避などである。

一般的に乾燥地帯の遊牧民には生活形態として豚より羊が適合していることは自明の理である。そこで起きる疑問は中東ならとにかく東南アジアで遊牧民の都合に従う必要があるだろうか、ということである。

ところでこの辺の質問をイスラム教徒に行うと白ける。何故なら普通のイスラム教徒は教義の因ってきたる理由まで考えたことがないからである。イスラム教徒にとってコーランは絶対である。そこに不浄と記されていることは疑義をさしはさむ余地がなく不浄である。そもそもイスラム教徒にとつて『コーラン』とはキリスト教徒にとっての『聖書』とか仏教徒にとっての『お経』のような解説書的存在ではない。コーラン自身が神の言葉で神聖にして不可侵である。

このような理由で豚は食料としての嗜好の問題ではなく、豚は触ることはもちろん見ることさえ我慢できないものとして存在自身が忌避されるものである。一度でも豚を調理した皿の使用も許されない。中東の石油成金国の王様の海外旅行には食材、料理人はもとより、調理器具、皿にいたるまで持参するらしい。

イスラム教国でモスクに豚の死骸を投げ込めば戦争になることは必至である。インドのセポイの反乱、スマトラ島のパドリ戦争(→278)は何れも豚のタブーが引き金であった。

2001 年の味の素事件はグルタミン酸ソーダの発酵に使用している発酵菌の保存用の培地の一部の栄養源として外部より購入した大豆蛋白分解物質が、その製造過程において触媒として豚由来の分解酵素を使っていたということである。味の素はハラルの認証を得た後に製造法の一部を変更したものの製造過程のチェックが甘かったらしい。

インドネシアではイスラム法に反しない食品であることを認証してもらってハラルのマークをつけて売られる。

⇒066.タブーの豚

821. インシャらー[15]

インドネシア人との会話でよく聞かれる言葉に「インシャらー」がある。これは「神のお恵みがあれば」という意味のアラビア語である。インドネシアに限らず、アラビア人を始め全世界イスラム教徒との会話に使用される。

イスラム教徒と何か約束をする際に先方が発する「インシャらー」との発言は「もし神様がそう望まないなら、申し訳ないけれど約束を破る結果になるが勘弁してくれろ」という意味である。イスラム教弁護者によると人が今晩にも死ぬか、明日も生きているかは神の御心しだいである。人が勝手に行う約束は神の意向に反しているかもしれない。従って敬虔なイスラム教徒であるほど「インシャらー」を本気で考えているという。

自分の子供が亡くなってもそれほど悲しまないのは子供の生存は神の御心がなかったと諦観することにも通じる。

しかし現実の「インシャらー」はイスラム教徒の約束不履行の免罪符である。約束履行の意図が初めからなく「ケセラセラ＝なるようにしかならない」の意味で使われることが多い。この言葉を聞いた場合は、その約束の内容と話手が頼りになるかどうかをよく確かめねばならない。とにかくイスラム教徒は「インシャらー」があるから約束を破ることに良心の呵責(かしゃく)はない。

イスラム教徒＝インドネシア人が嘘吐きというのは暴言であろう。インドネシア人が嘘をつく割合が高いという事実の数字的根拠はない。しかし数字的根拠はなくてもインドネシア経験の長い人ほどインドネシア人に騙された痛恨の思いがあるはずであるが、黙して語らない。

インドネシア人が嘘吐きといわれる要因は「インシャらー」という言葉の安易な使用にある。こんな勝手な言葉で無責任が正当化されることがイスラム教徒の後進性である。インドネシアの巨額の対外債務があるが、それでもさらに外国に借入金の増額を求める。巨額の債務の返済はオイルブームの再来を期待しているのだろうか。もしオイルブームが来なければ「インシャらー」である。

外国企業が合弁のローカル・パートーナーを探す際に「インシャらー」のプリブミ(→474)より約束に忠実な華人を選ぶのは当然の理である。

イスラム教徒にとってこの世での善行は天国への行くための事前活動である。彼らにとって善行とは①信仰の告白、②礼拝、③喜捨、④斎戒、⑤巡礼の5つの行である。これだけを行えば安心して暮らせるから伝統主義を打ち破ることもないし、労働が救いであるという思想もない。人、まして異教徒との商取引の信用に関わる契約履行についてはインシャラーである。

ヒンドゥー教徒のように宗教的な生き方に徹底すればそれなりの生き方であるが、イスラム教徒の生臭さは「インシャらー」という逃げ道だけを確保して異教徒の物質的豊かさに対する嫉妬だけは強いことである。

---

[15] 〈編者註〉インシャらーとカタカナに平仮名が混じっているのは、「ら」の音がＬの発音という意味で注意するように著者も使っているのであろう